

令和元年6月19日現在

機関番号：12401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2018

課題番号：26780268

研究課題名(和文)精神疾患の流行に関する社会学的研究

研究課題名(英文) Sociological studies on the epidemic of mental disorders

研究代表者

佐藤 雅浩 (Sato, Masahiro)

埼玉大学・人文社会科学部研究科・准教授

研究者番号：50708328

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、精神疾患の流行に関する社会学的な知見を蓄積するために、精神医学的な知識の普及過程に着目し、実証的な調査研究を行った。現代社会において患者数の増加が指摘されている「うつ」を主たる事例として通時的・共時的な視座から分析を行った結果、マスメディア記事の分析からは1990年代後半から大衆向けの精神疾患情報が増加していること、精神医療ユーザーや医療専門家に対する量的および質的調査からは、病気の当事者が受診以前から積極的に精神疾患に関する情報を収集していること、専門家らは精神医学的知識の大衆化に懐疑的な見解を抱いていることなどが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代の先進諸国においては、「うつ病」など各種の精神疾患に罹患する人々の数が増加していると言われる。しかしその一方で、こうした患者数の「増加」は、製薬企業や一部の医療関係者による疾患喧伝(病気の押し売り)の効果に過ぎないという批判もある。本研究においては、精神疾患に関する医学的知識の普及や当事者の知識受容プロセス、さらに医療専門家の認識を調査することで、精神疾患の流行に関する社会学的な分析を行った。

研究成果の概要(英文)：This research project aimed to clarify some of the sociological mechanisms on the epidemic of mental disorders, such as increasing number of depression sufferers in Japan, focusing on the diffusion process of mental health related information within society. Through analyzing qualitative and quantitative data gleaned from internet surveys, interview surveys, and academic research, it became evident that: (1) media reports on mental health care has been rising since the late 1990s in Japan, (2) most patients who had been seen in mental health clinics were proactive in searching for information regarding their disorders, (3) about half of the clinical psychiatrists have a skeptical view of the "increase" of depression patients. These findings suggested that there certainly is circulation of mental health related information in society, however psychiatrists' skeptical view might be a deterrent to the circulation of this information in Japan.

研究分野：社会学

キーワード：精神疾患 メンタルヘルス 精神医療 精神医学 うつ病 気分障害 流行 医療化

1. 研究開始当初の背景

本研究課題の申請時における背景・動機は、現代社会に生じている現実的な課題に対応する背景・動機と、当該分野の学術研究の現状に関する背景・動機に分けられる。に関して言えば、後述するような、現代の先進諸国における精神疾患患者数の「増加」の指摘があり、この現象に対して論者によって異なる解釈がなされているという状況が挙げられる。に関して言えば、上述のような精神疾患の「増加」に対して、社会学的な研究が乏しいことが指摘できる。とくに当該の問題に関しては、科学哲学や歴史学等の研究蓄積に比して、社会学的な研究としては特定の時代や地域、特定の事例のみを対象とした研究が多く、これまで何度か繰り返されてきた精神疾患の流行という現象を、広い視座から把握しようとした研究が少ない。以上のような問題意識から、本研究においては、精神疾患の流行現象について、社会学的な観点から理論的・実証的な把握を試みることを目指した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、現代社会において深刻な問題となりつつある精神疾患の流行（公式統計において精神疾患に分類される患者数の増加）現象について、社会学的な観点から新たな知見を提出することにある。日本をはじめとする先進諸国においては、過去数十年にわたって「うつ」に代表されるメンタルの不調を訴える人々の数が増大し、深刻な社会問題となっている。だがその一方で、こうした精神疾患の流行は、製薬企業や医療専門家が新しい疾病概念を創り出し、いわゆる病気の押し売り（disease mongering）を行っているのではないかという批判も増大しつつある。こうした現状に対し、本研究では社会学的な手法を用いた歴史的・現代的な調査を行うことで、この現象に対する新たな分析視座を構築することを目指した。

3. 研究の方法

本研究の調査手法は、過去の医学論文やマスメディア報道を対象とした歴史社会学的な研究と、現代の関連する諸アクターに対する定量的/定性的な社会調査に大別される。前者の歴史社会学的な研究においては、これまでの社会における精神疾患の流行（20世紀前半の「神経衰弱」や戦後の「ノイローゼ」と、現代における「うつ」に代表される精神疾患の流行現象を比較し、1990年代後半以降の日本において、どのようなアクター間の相互作用の帰結として、疾患の流行を可能とするような社会状況が生じたのかについて考察する。また後者の現代社会を対象とした経験研究においては、自己の精神的な不調を認識し、精神科クリニック等の医療機関を受診した経験をもつインフォーマント、医療現場において精神疾患を訴える患者の増加に直面している医療関係者、医学的知識の大衆化に関与するマスメディア関係者等に対して面接調査および質問紙調査を行い、現代における精神疾患の増加の社会的な背景を考察する。また以上の考察を踏まえ、本研究では科学哲学者のI.ハッキングが提唱する精神医学的知識の「ループ効果」という視点を理論的な支柱としつつ、精神疾患に関する医科学的な知識が当事者の間で受容され、最終的に当該の疾患そのものに対する知識を変容させていく過程について、理論的な検討を行う。

4. 研究成果

本研究の研究成果は、以下4点にまとめられる。

過去の資料を対象とした歴史社会学的調査

主として1970年代以降のマスメディア資料および専門家むけ雑誌等をデータベース化しつつ分析し、特に「うつ」を事例として精神疾患に関する医学的知識の大衆化過程を調査した。その結果、従来の研究では、かつての「鬱病」が重篤で比較的稀少な疾患と見なされていたことが指摘されてきたが、それは専門家むけ言説レベルでの認識であり、マスメディア言説のレベルでは1970年代から、他の心因的な精神疾患（ノイローゼなど）と同様の言説化がなされていたことがわかった。即ち「うつ」に関する大衆的な語りは過去数十年で大きな変化はなく、臨床現場で実際に「うつ」と診断される者の増加と、それに対する新たな言説の構成が、日本では1990年代後半以降の主要な変化であると考えられる。しかしその一方で、精神疾患全般に対するマスメディア報道、中でも事件や事故の報道とは関連しない一般的なメンタルヘルスに関する言説（疾患の原因や予防法、典型的な症例、簡易的なチェックリストなどの情報を伝える記事）は増加傾向にあり、このことが後述する自己を「うつ」と見なす人々の増加に結び付いている可能性が考えられる。

医療機関を受診経験のあるインフォーマントの行動と認識に関する調査

次に、精神科クリニック等の医療機関を受診した経験をもつインフォーマントに対する調査結果について述べる。本調査は2015年度に実施されたものであり、精神疾患の流行に寄与する重要なアクターの1つであると考えられる精神医療ユーザー（精神科医療に患者として関与したことがある人物）を主たる対象とした社会調査である。具体的には、(a)「うつ」で通入院経

験のある全国 20～69 歳の男女を対象に、インターネットを用いた予備的な質問紙調査を先行しておこない、500 名のインフォーマント（男性 211 名、女性 289 名）から通入院の状況や病気に関する情報の取得方法について回答を得た。また、当該予備調査の結果を踏まえた上で、(b) 同様に「うつ」で通入院経験のある関東在住の 10 名のインフォーマントを対象に、2015 年 9 月にそれぞれ 1 時間程度の半構造化面接調査を実施した。その結果、(a) の調査からは、多くの回答者が「うつ」以外にも複数の精神科における診断を受けており、各種の抗うつ薬を服用した経験を有すること、また医療機関を受診する前後の時期に、各種のメディアを通じて、自ら積極的に病気の情報を収集していたこと、男女別にみた場合には、女性のほうが多くの医療機関を受診している一方で、治療において専門家への信頼度が低いことなどが明らかになった。また (b) の面接調査からは、それぞれのインフォーマントが自らを病気であると自認するに至った具体的な経緯や、自分の症状を理解するための精神医学的知識を習得する際に活用したメディアやその方法、病気の経験が自らのライフイベントに与えた影響等が明らかになった。

現代の精神医療関係者による精神疾患の流行に対する認識の調査

次に本研究においては、精神疾患の流行という現象に対する医療専門家の見解を明らかにするために、現代社会において論争的となっている「うつ」の増加を主たる事例として、専門家向けのテキストを対象とした資料調査、日本全国の精神科医を対象としたインターネット調査、同じく臨床に携わる精神科医を対象としたインタビュー調査、を実施した。

このうち の資料調査に関しては、国内学会のシンポジウムおよび精神科医の記した著作等を検討することにより、現在の精神医療関係者が「うつ」の流行に対してどのような評価を下しているのかを調査した。その結果、論者によって見解の多様性はあるものの、総じて臨床家らは現代の無限定な「うつ」概念の拡大に対して懐疑的な態度を示していることがわかった。ただし臨床家らの問題意識は、向精神薬に関する製薬企業の営利主義的販売戦略や診断基準の未整備状況にあり、患者や臨床家自身の相互作用を含めた問題の考察は少ないことが判明した。

次に の精神科医を対象としたインターネット調査は、2017 年度に医療系調査会社に委託して実施されたものであり、同社に登録されている日本全国の精神科医に対し、インターネットを通じて回答を求めた。調査項目は「うつ」の増加原因に関する認識、新しい「うつ」概念の有効性に対する認識、投薬治療以外の治療法の実施実態、マスメディアにおける「うつ」に関する情報の有効性と限界への認識などであり、有効回答数は 173 であった。その結果、「うつ」に分類される患者数が増加した原因については、疾患啓発広告の影響や精神科クリニックの増加、診断体系の変更など、いわゆる構築主義的な視点から現況を分析する回答者が存在する一方、ストレス耐性の低い人の増加、非正規雇用の労働者の増加など、実態としての社会の変化を原因と見なす回答者も存在することが判明した。またマスメディアの影響については、来院する患者の相当数が受診前から自己診断を行っており、その背景として各種のメディアを通じて流布される大衆的な医療情報の影響が考えられるとの回答が多くみられた。これらの回答からは、「うつ」の増加に対して、精神科医たちが医学以外の要因についても多様な意見を有していること、またその内容は、同現象について論じた既存の書籍等の内容に近似していることが明らかになった。

最後に の精神科医を対象としたインタビュー調査は、上記 の調査において協力が得られた各医師に対し個別にメールで依頼を行い、2018 年度に実施された。質問項目は の調査と同様であるが、特にマスメディアやインターネット上の医療情報が患者数の「増加」に与える影響（いわゆる「自称患者」の問題）について対象者の認識を詳しく調査した。その結果、インターネット調査から得られた知見と同様に、臨床現場の精神科医たちは、各種メディアが流布する大衆的な医療情報によって自分を「うつ」だと認識し、医療機関を受診する人々が増加しているという現状認識において一致していた。また、そうした人々に対して精神科医たちは概して懐疑的な視点を共有しており、本来のうつ病患者はより重篤な症状を呈するはずであること、自主的に来院する患者の多くは一時的な抑うつ状態に陥っているに過ぎないか、他疾患（例えば発達障害）の二次症状として抑うつ的な症状を呈している可能性に言及していた。

理論的検討

以上の調査および先行研究の知見を考え合わせるならば、科学哲学者の I. ハッキングが指摘している精神疾患の流行メカニズム、中でも彼が「ループ効果」と名付けた知識と人間の相互作用過程については、現代の日本社会における同様の現象（特に「うつ」の増加）に対しても概ね適合的であることがわかる。すなわちハッキングは、人間の分類に関する新たな知識の創出、それらの日常生活への浸透、当事者たちによる知識の受容や修正や拒絶、彼らの振る舞いの変更、それによる当初の分類や知識の変化、という一連の過程を「分類的ループ」と呼んだが（Hacking1999=2006）、本研究から得られたデータからも、精神疾患の流行に関与するこの一連の過程が観察できた。ただし、ハッキングは精神医学的知識の「ループ」について、主として患者側に焦点をあてた考察を行っているが、医療専門家の側にもその効果を促進または停滞させる可能性がある要素が存在していることを、本研究の理論的含意として指摘できる。具体的に言えば、上記 で述べたように、精神医学的知識を受容し自己を精神医学的な患者であると自認する人々に対し、医療専門家が彼らを現代社会の被害者として同情的に理解する場

合には上記効果を促進する可能性が考えられる一方で、医療専門家が彼らを「本当の」疾患ではないとして非共感的に眼差す場合には上記効果が停滞する可能性が考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

佐藤 雅浩、The diffusion process of the concept of trauma in contemporary Japan, 1990s-2000s、埼玉大学紀要(教養学部)、査読無、54巻1号、2018、1-9

〔学会発表〕(計4件)

佐藤 雅浩、精神医学的知識の普及と医療専門家の役割に関する研究、日本社会学会、2018年

佐藤 雅浩、ヒステリーと神経衰弱概念の普及に医療専門家が果たした役割について、科学社会学会、2017年

佐藤 雅浩、精神医学的な自己認識の形成過程に関する考察 「うつ」患者のメディア接触経験の分析から、日本社会学会、2017年

佐藤 雅浩、精神疾患の流行を規定する社会的要因 「うつ」と「神経衰弱」の比較から、日本社会学会、2015年

〔図書〕(計1件)

鈴木 晃仁、高林 陽展、Christopher Harding、佐藤 雅浩、江口 重幸、北中 淳子、Amy Borovoy、Allan Young、東京大学出版会、シリーズ精神医学の哲学 第2巻 精神医学の歴史と人類学、2016年、272頁(分担執筆:108-130頁)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

佐藤 雅浩、精神疾患言説における戦争と神経 近代日本の新聞報道を中心に、埼玉大学人文社会科学系科学研究科学際系 2017年度連続シンポジウム・ワークショップ、2017年

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。